

# 日本文学の魅力に迫る

## ～日本三大随筆を読む 「方丈記・徒然草」編～ 徒然草 7

講師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生

日時：2月23（月） 10：00～11：50



### ■第117段～243段 抜粋

各段の原文読みと現代訳を交えた解説で現代にあてはまめて  
教訓有り、苦笑有りの講義・・

#### ■第117段

友とするに悪き者、七つあり。一つには、高く、やんごとなき人。二つには、若き人。・・



友達にするのに、よくないものが七つある。一つには高貴な身分の人、二つには年少の人、三つには無病頑健の人、四つには酒の好きな人（175段へ）五つには武勇の人、六つには虚言家、七つには欲の深い人、善い友は三つある。一つにはものをくれる友、二つには医者、三つには知恵のある人

#### ■第172段

青年時代には血気が体内にみなぎっているから、心も事物に感じやすく欲情さかんである。一身を危険にさらして砕けやすいことは、まるで珠を転がしているようなのである。年を取ると精神が衰え、蛋白に何事にも感動しなくなる。心がおのずと平静だから、無益な事はなさないで、とかく我が身も苦勞なく、他人にも迷惑をかけまいと心がける。

#### ■第175段

世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、まず酒をすすめて、強ひ飲ませたるを・世間には心得がたいことも多い。何かにつけて、先ず酒をすすめ、無理に飲ませて面白がるのは、どういうわけだか分からない。飲む人の顔は我慢しかねたように、眉をひそめ、人目を見はらかつては酒を捨てようとし、すきを見てはその場を逃げ出そうとするのを、捕えて引き留めて、むやみに飲ませるので、ちゃんとした人も急に気違いになり、健康な人も、見る見る大病人になって前後不覚に打ち倒れてしまう。

酒の酔いは他人の様子で見てさえ深いなものである。深い思慮の敬服すべく見えた人まで、無分別に笑いののしり、多弁になり、烏帽子は横っちょに曲がり、装束の帯や紐などはほどけたままに、袖をまくってすねを高く蹴り上げはしたない有様などは、どうてい平常の人物とは考えられない。また自慢話を聞き苦しく吹聴するのがあったり、酔い泣きをしたり、下等な連中は大声に悪罵し合い喧嘩になる。あさましく、恐ろしい有様、外聞の悪い不愉快なことばかり起って、果てはやらぬというものを無理矢理奪い取ったり、縁から落っこちたり、帰途には馬や車から落ちて怪我をしでかしたり、乗り物のない連中は、道をよろめき歩いて土堀や門の下などに向かって言うをはばかりのようなことどもをしちらかす。

こういういとうべき酒ではあるが、また捨てがたいときもあるものである。月の夜、雪の朝、あるいは花の下などに、ゆったりと話し出して杯を取り出すのは、すこぶる興を添えるものである。退屈な日に、思いがけぬ友達が来て酒盛りが始まるのは楽しいものである。またお近づきもない高貴の方の御簾の中から菓子やお酒などを結構にとり合わせて差し出して賜るのは、誠によいものである。また、冬、狭い場所で火に物を煮たりしながら、隔意のない仲間が寄り集まってどっさり飲むのはまことにおもしろい。☆本年度 最後の講義でした。